

いの流水俳壇

松尾 満津於 選

「当季雑詠」

森 洋彦

音信は常に片道雁渡る

(評) 堅くくしいところがなく、俳句の定型に徹した句である。秋冬の候に海を渡って我が国に飛来して、春北方に帰って行く、それが雁渡るである、秋に雁の群が海を越えて来るとき、波の上で翼を休めるため胸えて来た木片を、陸に着くと落として置き、明春再びその木片を胸えて帰ってゆくのである。雁でさえ常に往復のことを考えて海を渡るのに、音信はいつも片便りというのは何故？…便り無しは常に待つ人の心を暗くする。一常に片道」は作者の心中を言い尽くされた表現の妙。

川村 博子

幼子の手を離れては土筆摘む

(評) 若い母親と幼児との日常的な情景である。下五の一十筆揃む」でこの句にたちまち生気が生まれた。もう、ひとりでもできる年令であろう、助詞の離れて「は」の働きの情景をいっそう鮮明にしている。「もう行くよ」と母の手を引く張る足、動くよとしない母、いっばいに伸びた上筆、まさ

に春爛漫の野遊び。

伊藤 たみ

今年まだ会はぬ誰かれ春果つる

(評) 春の季節には、いつも決まって顔を見せる人なのに今年はおの人もこの人もまだ顔を見せしてくれない。花は既に散ってしまつたのに…という句意。作者には孤独な環境があり、交す言葉も少ない暮らしがあるのではないだろうか。胸襟を開きあう間柄はすぐには作れない。矢張り会い度い誰彼が恋しく思われるのである。「春果つる」は即ち花も終わることにつながる。

川村 千図子

ふる里の花に浮かれし一会かな

(評) 桜が満開の頃になると次第に心がうきだるようになる。地域内外の人に案内して、同窓会・級会・趣味の同好会・郷土会等々、名目をつけ旧懐の思いを楽しんだり、疎遠の清を埋めたりするのが季節に相應しい行事である。作者はふる里遠くを暮らしている。「花に浮かれし」は、久し振りに興にのつて夢中になつたのであり、一「会」とは一生に一度会うことを言うが、この句の場合そんな大層なものではなく単に、久しぶりに花のふる里に帰って来た感激の深さと理解したい。

山袋のしたたる水も春の音
川上こよね

耕して昔平家のかくれ里
友草 水月

物干しの竿に片寄る春一番
柴田まさ子

料峭や昏きに在す湯天神
大川 節弥

風誘う花に誘われ花の旅
中野 妙子

土佐の山峰に雪おく雨水かな
竹崎 光子

春愁をふっさるゴミの収集日
片岡 包女

咲き満ちて仙台桜にあるかけり
間 浩太

ひと駅を歩いてみるか花の雨
筒井 眉躬

春霞三嶺にかかりし神々し
渡辺万利子

つぎつぎと旅立つ子等へ花吹雪
中野 妙子

父に似しうしろ姿や木の芽風
楠目 哲朗

はかなさを泪に代える落椿
中屋 桜子

戯れ言も愚痴も受け入れ花筵
弘瀬うき子

トンネルを出でて山脈春霞
鈴木 公子

春雨に芝生の青み少し増し
鈴木 公子

暮敵も将棋仲間も花席
満津於

次題「当季雑詠」
6月25日締切「五句」

問い合わせ・提出先
吾北教育事務所

いの町上八川甲2010
電話867-2133

平成16年度こども川柳年間優秀作品

入選作品

最優秀賞

友だちは 何でも言える 宝物

神谷小 6年 中野 莉

優秀賞

先生が にっこりにっこり にらんでる

中追小 3年 安岡 伸也

よるのほし きらきらひかる うたってる

川内小 3年 西村 栞

サンタさん みんなの笑がお とどけてね

伊野小 4年 高橋いさぎ

入選

おこられて 目をみるものが ちずかしい

神谷小 5年 濱田 悠介

先生の 笑顔がこわい とさがある

枝川小 6年 大原 桃子

時計見て あせってしまう お宿題

伊野小 5年 片岡 紗羅

おかあさん テストになると おにになる

枝川小 5年 戸梶 実咲

てあらいは しなさいけない でもさむい

伊野小 3年 古良あすか

こいのぼり 一番上は おじいちゃん

伊野小 5年 森田 菜月

※学年は平成16年度のものです。

「いの町体育会長杯スカッシュバレー大会」のお知らせ

よい汗をかいて、気分をリフレッシュしませんか！
職場、学校関係、友人同士でぜひご参加ください。

日時 7月10日(日) 9時～
場所 高知県立青少年体育館
参加資格 18歳以上の男女(高校生は除く。)
種目 混合の部(男性1名、女性2名) 女性の部
参加料 1チーム500円
申込締切 6月24日(金)
申込先 伊野公民館 893-2012 ☎893-2013
問い合わせ先 伊野地区スカッシュバレー部長 岡林 893-3843